

---

# 花も恥じらう男の子っ!?

緋色ツバキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

花も恥じらう男の子っ！？

### 【Nコード】

N1249F

### 【作者名】

緋色ツバキ

### 【あらすじ】

目覚まし時計の音で起きて、洗顔のために洗面所にいく。そこまではないとも変わらない日常だった。なのに、なにに…「なんでボクが女の子になってるのー!？」そう、鏡の中に映るボクは紛れもなく『女の子』だった。

ボク、女の子になりました

『時間です。起きましょう。時間です、起きま』

パンツと目覚まし時計を叩いて無機質な声を止める。

「ふあゝゝ…もう7時なの？」

寝た感じがあまりしないから、今が7時じゃないことを祈ったんだけど決まった時間に鳴る目覚まし時計が時間を間違えるはずもなく、やっぱり時間は7時だった。

「ううゝなんだか妙に気だるいんだよね…」

うーうー唸りながらもボクは布団を捲って上半身を起こした。違和感を感じたのはその時だった。

「え？髪の毛？」

思わず呟いてしまっていた。

だって、肩くらいまでしかないボクの髪の毛が腕にかかるほど長いはずがない。

どうせ姉さんが寝てる間にウィッグでもつけたんでしょ、と思いなからウィッグを外そうとした。

「…って、え！？ウソ！？とれない！！」

あわててボクはベッドから立ち上がり洗面所に姿を確認しようと歩踏み出した瞬間

「いだっ！？」

パジャマの裾を踏んでしまい、額を床に打ち付けてしまった。

「って、ちょっと待ってよ。パジャマの裾はピッタリだったはず…」

同時に、血の気がさつとひいた。

一刻も早く姿を確認しないと

そんな思いに駆られながら、二階の自室から一階の洗面所へと転がるようにして進んでいく。そして、ボクは現実を知った。

「嘘…でしょ？」

髪の毛が長くなっていたのも、パジャマの裾を踏んでしまったのも、なぜか声がいつもより高いのかも、目の前の現実が正しければ説明がつく。

つまりボクは、

「女の子になっちゃったの!？」

鏡に映ってるのは小学校高学年くらいの女の子だった。

金髪のストレートで長さは腰辺りまであって、肌は白く、一目見て美少女と分かるくらい整っている。

ついでに言うなら、女の子の顔は驚きに染まっていた。

「どうしたのよ…って、あなた誰!？」

「あ、ゆき姉!!」

戸惑うボクのところに救世主が登場。

茶髪の長い髪をおろしたまま、ゆき姉はこっちによつてきた。

「あのね、ゆきね…」

「かわいいー!!」

「ふにゃあ!？」

事情を話そうとしたボクに飛び付いた姉はそのままボクを抱きしめてきた。

ちなみに、ゆき姉は長身なので今のボクの体格じゃ抗うこともできず大きな胸に顔を埋めることしかできない。

「んー!!んー!!」

必死に叫ぼうとするが、胸に顔を埋めているため声が出ない。

ボクはゆき姉の胸で窒息死するのか…、なんて思いながら徐々に意識が遠退くを感じた。

「で、鏡をみたら女の子になっていたと」

意識が戻ったボクは椅子に座ってゆき姉に大まかな出来事を話している。

けれど、どんどんゆき姉の目が疑わしそうになっていくのはなぜだろう。

「君ねえ…つくならもうちょっとましな嘘をつきなさいよ」

「うう…」

「ちょ、ちょっと泣かないでよ…」

立ち上がり、ボクを後ろから抱きしめてくれるゆき姉。

後頭部にあたる感触が気持ちいい。

「信じてくれる？」

「うっ…わ、私が出す質問に答えてくれれば信じるわ」

見上げながら訊ねると、ゆき姉はなぜかそっぽを向いた。

「わ、私たちは昔ある大切な約束をしました。その約束とは？」

大切な約束。

多分それはあの日交わした約束のことを言っているんだと思う。

両親を失ったボクらが、絶対に一緒だよって誓いあった約束。

「…わからない？」

「分かるよ。あの日、ボクらが両親を失ったとき。ずっと一緒だよって約束したこと」



「……………!？」

言った瞬間、ボクはきつく抱きしめられた。

「ゆき姉……」

「グス……ごめんなさい……」

「……………」

無言でゆき姉の背中を撫でてあげる。

しゃくりあげていたゆき姉がだんだん落ち着いてくるのがわかった。

「もう大丈夫。ごめんなさい……」

「それより、信じてくれる?」

「ええ、君は正真正銘私の弟よ、ユウ」

「……………!!ゆき姉!!」

「よしよし……」

思わず抱きついてしまったボクの頭をゆき姉は優しく撫でてくれる。

「それにしても、問題が山積みね……」

「あ、そうだね……。学校とか」

「学校は運よく4月だから新入生として入ればいいわけだし……まあ学校は私がかんとかするわ。それより服よ、服」

「あ……」

そういえば、ボクは男物の服しか持ってないんだ……

「ゆき姉のじゃダメ？」

「ユウに私の服が合うと思う？中学生のころのやつでもユウじゃ大きすぎるわよ」

「うつ…ゆき姉、背高いもんね…」

「私が高いのもあるけど、ユウがちっさすぎ。男の子のときでも確か150センチくらいしかなかったじゃない。今なんか、140センチくらいじゃないんじやない？」

ゆき姉は身長170センチで中学生の頃から今の（男のときの）ボクより大分背が高かった。

「…って、そういえば私の小学生の頃の服があったはずだわ。それをきて今から服を買いに行きましょう」

「え…うん」

「じゃ、ほら早く着替えて」

追いたてられるようにしてゆき姉の部屋に案内される。

その時のゆき姉の顔はなんだかすごく楽しそうで、ボクは少し不安になってしまった。

**ゆき姉と買い物(1)(前書き)**

風邪を引いてしまい更新が遅れました…

ちなみに今回はゆき姉空気ですのでご注意を

## ゆき姉と買い物（1）

「これ！絶対これよ！ああ〜もうめちゃくちゃ可愛いわぁ」

語尾にハートマークでも付きそうな勢いで抱きしめてくるゆき姉にボクは苦笑するしかない。

でも実際、ピンクのワンピース姿で鏡に映るボクは妖精のように可愛いかった。

「よし、それじゃ早速駅前のショッピングモールにいくわよ！」

「う、うんっ」

興奮気味のゆき姉に手を握られながら玄関で靴（ゆき姉のお古だ）をはいて家を後にする。

どんな服を買うのか色々想像していると、いつの間にかショッピングモールに着いていた。

まずゆき姉が一番最初に向かったのは可愛い系の服がたくさん置いてあるところ。

ゆき姉が目を輝かせて服を選び出すので声を掛けづらかったボクはとりあえず店内を物色することにした。

「あ、これとか可愛いかも」

数ある服の中でも真っ先にボクの目を引いたのがピンクのフリフリがついたスカートだった。

「結構いいかんじだよねー…」

ボクが着ているところを想像してみる。

…うん、大分可愛いっ。

「お客様、よろしければ試着してみますか？」

「ひゃわっ!？」

「きゃっ!？ど、どうかなさいましたか!？」

「あ、いえその…えーっと…い、いきなり声をかけられたのでびっ

くりしてしまつて…。ごめんなさい…」

「あ、それは大変失礼しました。で、どうでしょう？試着なさいませんか？」

店員さんはニコリと微笑みながら店の奥にある試着室を指差した。

ゆき姉はゆき姉で色々選びまくってるみたいだから試着しにいつても問題はないよね。

「じゃあお願いします」

「では右の試着室へどうぞ」

店員さんの後をついていきスカートを手にして右の試着室に入る。

鏡に向き合い、スカートに足を通したところで気が付いた。

「ボク、スカートの付け方知らないんだっ…」

「いかがでしょうか？」

「あ、あのう…そ、それが…付けられないんです…」

「あ、それでしたら私がやりましょうか？」

「うう…お願いします…」

恥ずかしいけど、ここは店員さんに頼むしかない。

「ふふ…。この服は可愛らしいですから、絶対にお客様にあづはらずです」

「あ、ありがとうございます…」

誉められて照れているボクに笑いかけながら店員さんはスカートを付けてくれた。

「ど、どうですか…？」

「ふふ。とても似合ってますよ」

「って、なんで頭撫でるんですか!？」



「あ、すみません…お客様があまりにも可愛らしかったの…。気分を害されたのなら謝ります…」

「い、いえ…謝らなくても大丈夫です」

「分かりました。その服、いかがなさいますか？」

うーん…ゆき姉に頼んで買って貰おうかな…

今さら服が一着増えたからって気にする人でもないよね。

「えと、連れの人が買ってくれると思います」

「ではレジの方で預かっておきます。また何かありましたらお呼びください」

「はい」

親切な店員さんはスカートを手にレジへと戻っていった。

「さて、ゆき姉は… いたいた」

まだ服を漁っていたゆき姉のところにいき買いたい服があるといつてレジへと向かった。

まあ、その前に大量の服を試着させられたけどね…

そのあとあの店員さんに服を袋に詰めてもらい、店を後にした。

店を出るときに頭を撫でられたけど… まあよしとしよう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1249f/>

---

花も恥じらう男の子っ!?

2010年10月11日01時45分発行